

塩の道保存会 いままでとこれから

土佐塩の道は、昔から連綿と歩き続けられてきた道ではなく、一度は途絶えた道でした。時の流れによって、かつてあった往来の気配はかき消され、草木が生い茂る森となりました。しかし、地域の人々の思いと絆を受けて発足した『塩の道保存会』は、忘れ去られた古道に再び光を当て、見事現代にのみがえらせました。いま、土佐塩の道が放つ新たな輝きとは。



▲塩の道復活のきっかけとなった庄谷相屋敷丁石。隣には故小松滋さんが詠んだ「丁石や 願ひ叶ひし 春竜胆」の句碑が建つ。

失われかけていた魅力

公文：後日数名で、庄谷相から赤岡へ向けて歩いてみると、やはり、まともに歩ける道ではない。廃れた道だから当然ですが、獣道のやぶをかき分けながら歩きました。道がどこを通っていたか分からず、近くの人に尋ねたりしながら、なんとか赤岡までたどり着きました。歩き終えた帰り道、これを眠ら

しておくのはもったいないという話になりました。実際に歩いたからこそ気付けたことですが、苦勞しながら歩く道のそこかしこで、思わず疲れを忘れるような景色や、魅力的な草花、そして歴史や文化の面影を見たからです。長らく忘れ去られてはいたものの、人の心を動かすような魅力が、この道にはあったということだと思います。近藤：塩の道は、庶民が生きていくために必要なものを運ぶ道。先ほど話した滋さんの思い出話ですが、お父さんが荷を担ぎ、赤岡からの夜道を帰るときのことを想像することがあります。街灯などない真つ暗な山道、獣の声を聞きながらひたすら歩く。荷の中には娘への土産がそつと入れられている。朝から歩き通して疲れ果てていても、娘や家族に会いたい一心で歩いたのだらうと思います。私も同

じ娘を持つ母として、この思いにはとても共感します。

塩の道は、そこを歩いた人々の思いが染み込んだ道です。ただ自然の中を歩くだけのウォーキングコースではなく、歴史と文化、人々の営みを感じることができ、奥深い魅力が詰まっています。

地域をおこす風

公文：その後しばらく、地元の人たちだけで細々と整備を進めてきました。転機は平成16年。塩の道の復元まではまだまだ道半ばでしたが、日本ウォーキング協会が選定する『美しい日本の歩きたくなるみち500選』に選ばれたのです。このことは、活動を盛り上げる大きなきっかけでした。周囲の見目も変わって認知されるようになり、行政からのバックアップも得られるようになりました。

地域起こしは地域の人たちの思いが一番大切ですが、思いだけではどうにもならないことがある。補助金やさまざまな知恵・アイデアという形で、行政支援が受けられたことは大きかったと思います。地域から発信されたものに対し、行政がいかにその魅力や熱意をくみ取るか。そこが大切なのだと思います。

思い出の丁石を起こして

公文さん（以下、公文）：いまは亡くなってしまったが、庄谷相の仲間だった小松滋さんから「庄谷相屋敷にある丁石を起こして」と頼まれたのが全ての始まり。丁石とは昔の道しるべだが、塩の道が廃れるとともにその役目を終え、昭和の南海地震で倒れたままになっていました。

近藤さん（以下、近藤）：丁石の前の林は、滋さんが子どものころは田んぼだったそうで、両親が農作業する間、石の近くに座ってよく遊んだと教えてくれました。当時はまだ塩の道が主要な道で、生活物資の買い出しは、滋さんのお父さんが何時間も掛けて赤岡まで歩き、重い荷を背負って帰ってきたそう。そんな時には必ず、滋さんへのお土産として、髪飾りやお菓子を買ってきてくれたそうです。公文：丁石を起こすのに地元の仲間を声を掛け、8人の有志が集まりました。平成14年のこと。起こしてみるとそれは立派なもので、字もはっきりと読める。歴史の重みと、かつてこの道を歩いた昔の人々の営みに思いが至り、これはぜひ一度、このいにしえの道を歩いてみようという話になりました。

これからの塩の道

500選に入ったことをきっかけに塩の道を歩いてくれる人も徐々に増え始め、その人たちの声を受けて、黒見休憩所の整備が始まりました。この事業をきっかけに大きく人の輪が広がり、それまで地元の人だけでやってきたことが、物部村の他地域、香北町、そして文代峠を越えた先の香南市香我美町にまで協力者ができ、塩の道保存会の発足にもつながりました。庄谷相は小さな地域。この地域だけの取り組みには限界がありますが、他の地域の心ある人たちの協力を得ながら、力を合わせて進むことができました。本当にありがたいことだと感謝しています。

近藤：塩の道保存会は今まさに転換期で、世代交代の時期に来ています。学校での課外授業や遠足への活用など、新しい取り組みを進めながら、公文さんたちが再生させたこの道を、時代を担う私たちが必ず守り育てていきます。そのためにも、一人でも多くの人歩きに来てくれることが大きな力になります。リピーターが多いことから分かるように、この道の魅力は歩けば分かる。ぜひ一度歩きに来てください。

丁石を起こした

地域も起こすようになったねえ

先人たちの思いが「緒」

塩の道を守りつづけて



塩の道保存会広報担当
近藤かおりさん

塩の道保存会副会長
公文寛伸さん

取材を終えて

庶民が生きるために往来した塩の道では、かつて人々のさまざまな交流がありました。その時代を物語る資料が乏しい中、この道はその時代の息吹を記憶し、丁石や野仏、小さな祠など、無言の遺物が語りかけてくれます。昔ながらの風景の中、歴史の道を踏みしめれば、先人たちの歩みに思いが重なる気がするのです。いまこの塩の道を通して、新たな人と人との輪が生まれています。これは、塩の道保存会の「言葉ではなく行動で示す」という姿勢から生まれたものだと思います。

土佐塩の道が放つ新たな輝き。自然、野草、山歩き。歴史に文化、人とのつながり。トレイルランもあるし、マニアックなところではコケが魅力的と言った人もいるそうです。ウォーキングで同行した人が言っていました。「こんな道知らなかったけど、歩いてみたらえい道やねえ」その懐の深い魅力は、歩いてみたら分かるそうです。